姫路市立城郭研究室ニュース「城踏」No. 64　2006年12月１日
編集・発行；姫路市立城郭研究室
〒670-0012　姫路市本町68-258　日本城郭研究ｾﾝﾀｰ内
TEL　079-289-4877　FAX　079-289-4890
URL　http://www.city.himeji.hyogo.jp/jyokakuken/

庭付・戸建はゆずれません

戦争中に築かれた城

近世における築城のピークは、江戸時代初期。それともうひとつは、幕末にありました。その理由としては、外国船の来航に対処するための築城や、戊辰戦争に関わる築城が主なものです。したがって、幕末におけるピークは全国的なものというよりも、地域的に偏りが見られるといえます。本号では、幕末から明治最初期に築城された事例について紹介します。

蝦夷地には江戸時代を通じて存在した近世城郭としては、福山（松前）城が唯一のものでした。もっとも、城主の松前氏は陣屋格でしたから、正確にいうならば福山陣屋があったということになります。しかしロシアの脅威が迫ってくると幕府は蝦夷ロを固めるため、嘉永２（1849）年、松前氏を城主格に昇格させて福山陣屋の改修を認可しました（同時に五島氏も城主格となり、石田城〈長崎県〉が築かれた）。現存する福山城跡は、この時に築城されたものです。家格上昇は松前家の念願ではあったものの、五ヵ年目参府から隔年参府、嫡子を含む家族の江戸在府など莫大な経費増加をもたらし、もうひとつの念願であった「陣屋ヲ城と相唱」えることは遂に許されませんでした（『松前町史』通説編第１巻下、1988）。ですから構造は城の構えであれ、福山城と言うのは通称で、幕府にとってはあくまで「福山陣屋」ということになります（ここでは通称を使用する）。

さて、明治元（1868）年、蝦夷地に榎本武揚率いる徳川脱走軍がやってきました。五稜郭はすでに徳川脱走軍に占拠され、渡島半島における戦争が本格化すると、福山城への攻撃も時間の問題となりました。すると藩主徳広はあっさりと城を放棄し、築造中の館（たて:厚沢部町）城に移りました。

戊辰戦争の最中、新たに築いた福山城を捨てて海岸部から内陸部に城を移転させたのはどうしてなのでしょうか。この直前に松前家では藩主崇広が急死し徳広が家督を継ぎますが、依然旧藩主勢力が実権を握っていたことで、これに不服の藩士たちがクーデターを起こしました。この時、人心一新と箱館に近いという理由から館城に移転したという見方があります（『国別城郭・陣屋・要害台場事典』東京堂出版、2002）。

しかしこうした見方は皮相的なもので（ネタバレになりますが）、土佐藩士千島季隆が「城築ノ要ヲ失ヒ唯稚重ノ美観ヲ弄ヒ旅客ノ憐ヲ売ニ似タリ」「外夷ノ覬覦如是皚然ト城塞ヲ顕ハシ何トシテ防禦ノ道ヲ得ンヤ兵学者ノ古轍ヲ守リ時代ニ因テ通窟ヲ不知ト譏笑セラルヽコト果シテ不免也可憂又可賤ナリ」と『探箱録』（土佐群書集成第39巻）で酷評したように、福山城の軍事施設としての構造的欠陥も理由の一つではありました。一方で、維新政府樹立を契機にして松前藩が自らの存立基盤を“海”から“陸”への転換を実行に移したことに関わることがすでに指摘されています（前掲『松前町史』）。「漁業経済一辺倒を改め、平野の多い厚沢部川流域を開墾して五万石程度の米作地を作るため」に本拠として館に城を築くことを、クーデター派は考えていたというのです（『日本城郭大系１』）。

周知のように、英露艦の蝦夷地来航やクナシリ・メナシの乱など、寛政年間に北辺情勢に大きな変動が顕在化してくると、幕府の蝦夷地政策も変わらざるを得なくなり、蝦夷地の直轄化（上知）を打ち出します。寛政11（1799）年に東蝦夷地の永久上知が決まると、これまで松前藩は家臣に対して蝦夷地における商場や川の知行などを与えてきましたから、上知は家臣への給付に大きな支障きたすことを意味しました。当然、藩の場所も含まれますから、藩財政への影響も決して小さいものではありません。その上、松前藩による蝦夷地と本州間の交易独占も崩れるので、それを基盤にしてきた藩財政もたちまち逼迫することは火を見るより明らかだったのです。そして文化４（1807）年、全蝦夷地が幕領になるにおよび、松前藩は陸奥梁川（福島県）に転封となりました。蝦夷地における権益を失い、わずか9000石の土地への移封は多くの家臣に「御暇」を命じる結果となったのです。

藩の存亡に関わるこれらの出来事は、否応無く今後の藩政に甚大な影響を及ぼしたことは想像に難くありません。上記の「漁業経済一辺倒を改め～」というのも、この憂苦の経験にもとづく見通しによると考えられます。こうなると、文政４（1821）年に松前藩が蝦夷地に復領しても、梁川転封以前のように藩を経営することは困難だったはずです。領内で農地を開墾し、それを藩財政の基盤に据えようとする意見が藩内で出てくることは、これまでの経緯を見ると当然の成り行きと思われます。

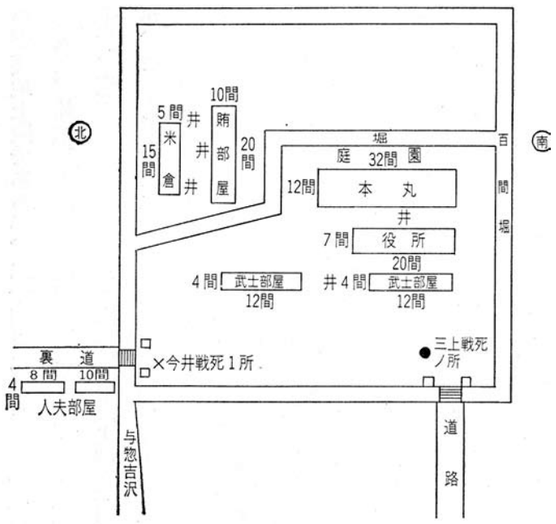
さて、これまで農業生産を本格的に行ってきた経験がない藩が、この事業を実現できるのかという疑問が生じます。実はこのクーデター派の背後には江差商人がいたことが推測されていますから（『北の守り』市立函館博物館、2006）、彼らの力を期待していたと想像されます。厚沢部川流域の農地開発は、江差商人にとって大きな利益をもたらすと見込まれたのでしょう。実際、慶応4（1868）年に始まった館城築造には江差商人の援助が少なくなかったようで、館に城が移れば江差はその外港となり、福山に対する江差の地位向上は必然との計算が彼らにはあったと考えられています（前掲『北の守り』）。もうこうなると館の場合、城は軍事施設云々と説明するのはあまり意味がないようです。

さて、西洋式城郭の要素を採用し、火砲を多く装備した福山城を捨ててまで、新たに築いた館城とはどんな城だったのでしょうか。厚沢部町郷土資料館に展示されている解説よると、下記のようなものだったといいます。

❶表門完全ナル城内ニシテ門柱ニハ銅又ハ美ナル金具付タリ
❷門番所長サ二間巾九尺ノ建物
❸庭園未ダ完成セズ夥多ノ庭石ヲ入レ樹木ヲ集メタリ
❹倉庫長サ四間巾二間藩主の貴重品ヲ集メタリ
❺本丸柾屋根壁ヲ用フ
❻米倉内地米ニシテ米上袋ヨリ運搬セラル其数六万俵
❼百間堀竪横百間四方（深サ四尺）柵ヲ廻ラシ之ハ十尺槍丸太ヲ使用ス

防御ラインとなる外郭は深さ1.2mほどの堀（とその堀土を掻き揚げた土塁）で、城内側には槍丸太を廻らしていました（❼）。これだけからすると、私たちが抱く城のイメージとは程遠い簡素な施設だったことになります。羽柴秀吉が攻城戦で臨時的に築いた陣城のほうが、よほど堅牢な造りだった場合もありそうです。しかし、ほかの箇条を読んでいくと、秀吉の陣城などとは築造理念が根本的に異なることが直ちに判明します。すなわち、表門には装飾が施され（❶）、規模はわからないものの藩主の居館も正式な書院造りの**御殿**で（❺）、もちろん**倉庫群**も完備されていました（❹・❻）。なお、❻では米蔵に内地米が収納されているとありますが、松前藩は館城貯蔵米として、慶応元（1865）年９月には長崎商人を通じて中国産の米を購入しています（宮下正司「館城と漢唐米」『新編物語藩史１　月報２』1985）。蛇足ながら、そうなると慶応４年以前から館築城の計画が具体的に進んでいた可能性も出てきます。そして、**庭**は造成途中ながらも庭石と庭木の収集は終わっていた（❸）というのですから、ほかの作事や普請と並行して作庭が進められていたことは間違いありません。時節柄作庭は後回し、なんてことは微塵も思っていなかったのでしょう。

こうしてみると槍丸太の柵などは福山城本丸の木塀に通じるものがあり、館城が新造なった福山城の本丸御殿を縮小コピーしたような施設だったことに気づきます。明治元年10月末、「粗完成セシニヨリ」（『麥叢録』）藩主が館城に移っていますから、居館とそれに付帯する施設はほぼ揃っていたとみられます。11月には徳川脱走軍の攻撃を受けて落城し、戦略的価値なしとして焼却されたようですが（『松前町史』通説編第２巻、1993）、館城は、当時の大名が自らの居所としての城郭もしくは陣屋を築くにあたり最低限必要な施設が何だったかを示す事例として注意しておきたいと思います。



館城平面図（『松前町史』通説編第２巻所収）